

令和七年度（2025年度） 卒業証書・学位記・修了証書 授与式 式辞

春の息吹が次第に高まりつつあるこのよき日に、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、保護者の皆様のご出席のもと、卒業証書授与式を挙行できますことを、心より厚くお礼申し上げます。

今日、このよき日に、ご卒業そしてご修了なさいます学生の皆さん、おめでとうございます。本学の教職員を代表して、皆さんの晴れの門出を、心より祝福いたします。

想えば、皆さんの多くが入学した頃は、コロナ禍によるさまざま活動制限がやっと緩められ、新しい日常が取り戻されつつあるときでした。

その頃、わたしたちは、大きな危機に直面していました。先輩から後輩へ受け渡されてきた学生文化が、途切れてしまうのではないかと、山陽の豊かな学生文化が、コロナ禍でいったん中断されると、そのまま継承されることなく、途切れてしまうのではないかとという危機です。この大きな危機を乗り越え、新たな学生文化を創造しつつ、これを、見事にパス、イット、オンしたのが、次へと繋いだのが、今、ここにいる皆さんであります。

さて、学長室に、額縁に入った一枚の色紙が飾ってあります。山陽学園の基礎を築いた上代淑先生が揮毫したものです。ここに、もってきました。後ろの遠いところからは、見づらいですが、「感謝、希望」と書かれています。

卒業の節目にあたって、私たちが「現在において過去を生きており」、そして「現在において未来を生きている」という時間論の観点から、「感謝と希望」の意味について考えてみたい。

まずは、人間の過去に対する関係、私たちが「現在において過去を生きている」ということについて、話します。

私たちは、普通、現在と過去の関係について、次のように考えます。過去は、動かしえない事実であって、私たちは過去に立ち返ってやり直すわけにはいかない。その動かしえない事実の一つひとつが積み重なって、私たちの現在ができていく、と。

この意味では、「過去が現在を創っている」と言ってよいでしょう。ところが、これとは全く逆に、「現在が過去を創っている」のだ、と言うこともできます。それはどういうことか。こういうことです。

なるほど、過去の事実は変えられないが、しかし、過去に対する私の態度は変えることができる。私たちはそのつどの現在において、過去に対して態度をとっている。過去の事実が何を意味するのかは、現在において決まることである、と。

過去と向き合い、これを受け入れるのか。それとも、過去を拒み続けるのか、この現在における態度のとり方によって、過去は違った意味を持つ。

過去を受け入れ、感謝とともに振り返る人にとって、過去は現在を支える確かな土台となるのです。

「おもひでぼろぼろ」とは、アニメ映画のタイトルですが、人生の節目において、あるステージから次のステージへ移行しようとする頃に、訳もなく昔のことが思い出される。あたかも、過去の方から、私たちに「それでもよかったと、受け入れなさい」と和解を迫ってくるかのようです。実際に、私たちは、人生の節目において、過去において自分の形成に与った人々に対して、「ありがとう」を言いたくなるのです。ちょうど、今のあなた方のように。

さて、次に、人間の未来に対する関係、私たちが「現在において未来を生きている」ということについて、話します。

私たちの現在は、一方で過去によって支えられています、もう一方で、未来によって支えられています。未来にはいったい何が起こるか分からない、未来は不確かなものとして私たちに与えられています。にもかかわらず、未来が私たちを脅かすものとしてではなく、むしろ可能性として経験されるのはなぜか。それは希望があるからです。私たちの現在は、この未来への希望によって支えられています。

過去に対する感謝と未来に対する希望、この二つはワンセットです。過去を感謝とともに振り返る人は、希望をもって明日を志すことができる人です。私たちの現在は、土台として過去と、可能性としての未来によって、両側から支えられています。

過去に対する感謝と未来に対する希望を、時間論の立場から、統一的に捉えて説明しました。

山陽を卒業するということは、山陽が「思い出の共同体」になること。山陽で出会った仲間と、仲間との思い出が、皆さんの未来への前進、勇気ある挑戦を「支える土台」となることを祈念しつつ、^{かじりよし}上代淑先生が、色紙にしたためた「感謝と希望」という言葉を、卒業の節目にあたって、皆さんへの「^{はなむけ}餞の言葉」といたします。

令和8(2026)年3月15日

山陽学園大学・山陽学園短期大学 学長 毛利猛